

図画工作教育の先駆者からの提案

中野 隆二

A Suggestion of Arts & Crafts Education by the Pioneer

Ryuji Nakano

(2013年11月27日受理)

1. はじめに

日本の学校教育が、明治の学制発布に始まって、本年で約140年の歳月が経過する。この間、図画工作教育は、ある一筋の道を辿ってきた。このことは安易に今日まで行われてきたのではなく、いろいろな人の教育に対する熱意によるものに他ならない。本研究では、この140年の節目を迎え、これまでの先駆者の努力によって今日まで教育方針が樹立したことを明確にしたいと考えるものである。しかしながら、今日の工作教育の現状において、驚く事態がみられ、図画工作教育の実践、在り方について見直さなければならない時期になったと考える。驚く事態とは、教師が実践的体験をせずに指導していることで、例えば、道具の使い方を知らなかったり、セットされた工作キットをマニュアル通りに作らせることなどで、教師自身が俗にいう「とらのまき」だけで教壇に立っていることである。従って、ここでは「初心にかえる」という言葉があるように、教育の基本について初心に戻り、今日の工作教育の在り方、捉え方そして教育の方法について、過去からの偉大な造形教育者の提案を見なおし、解決したいと試みるものである。また、問題解決するにあたっては、一般的に、問題の原因を追及し、その解決策を考えるわけであるが、本研究では、今日の驚く事態を問題提起として、「温故知新」すなわち、「昔のことをよく学び、そこから新しい考えや知識を得、また、過去のことを研究して、現在の新しい事態に対処する。」^{※1}という信念から、先駆者の著書をもとに当時の教育を見直しながら問題の解決を行い、今、戸惑っている図画工作の指導、これからの美術・図画工作教育の在り方を解明するものである。なお、過去の資料については、可能な限り入手できた実際の著書の内容をみていく。

2. 問題提起

今日の学校教育における指導者は、明治の学制から数えて4世代あるいは5世代へと引き継がれてきている。時代文明の発達とともに、図画工作教育の在り方は、違った方向へと歩むものと、専門性へ進むもの、その反対に衰退していく工作もある。今日のように、文明の発達が進化し、そのもたらすものは、図画工作教育にとって不利なものや有利なものがある。それは、材料である。過去において物資不足で教育が成立しない時代もあった。しかし、現代において物が不足することが考えられなくなってきている。災害等の悲惨な例外もあるが、今や便利な購入できる店やネット通信販売などがある。ところが、物はあっても、工作教育には大切な役目がある。それはものづくりのための伝統やその継承のためのテクニクすなわち技術、技巧、手の技術である。そのひとつに、手の延長として道具を使う。中でも、刃物は大切な役目をもっている。昭和初期から30年代までに、子どもたちに唯一許されていた刃物があった。「肥後守」(図1)というナイフである。当時の子どもたちは男女児ともに、この1本のナイフでいろいろなものを作って遊んだ。そして作ることや遊ぶことで、生活感とともに美に対する感覚を身につけてきた。今やこのような時代は過ぎ去り、工作ではなく、今やキットの組立と化身している。お陰で、道具を使う必要性もなくなり、お金さえあれば、面倒なものづくりはしなくても済むようになった。小学校の現場をのぞくと、工作の内容が、今では手づくりが少なくなってきており、教材はセットになったものやお菓子の箱などを利用した廃材工作、今で言うリサイクル工作が多く見受けられ、果たして、私たちは自分の手で材料を選択しない、ものをつくらぬ教育、生活でよいのだろうか



図1.「肥後守」の小刀のいろいろ
(昭和初期～末期のもの) (筆者撮影)

という疑問をもつものである。近年さらに、この小学校の教師をみざす学生も、然り、小学校のころ本来の図画工作を学んできておらず、何も知らない状態で、教壇に立とうとしている。さらにまた、最も芸術的感性が樹立する高等学校が、芸術教育を廃止し、主要科目とよばれるものだけに力を注いでおり、人間の文明・文化の根源となる芸術をしなくなってきた。高校からして、いまや以前の師範学校と呼ばれる頃の教育とは違い、合理主義的で、手でものを作ろうという学生は稀薄になってきた。これで将来を担う子どもたちを育成できるのであるかと疑問と不安が積み重なるばかりである。

3. 図画工作教育の基本的概念

教科教育百年史^{※2}によると「美術（図画工作）教育が制度を前提にして発足したのは、他の教科の例と同じである。しかし、制度の構造を見れば、今日の教科名でいう、国語、英語、数学を最上段として、以下社会科・理科グループ、その下に体育・音楽・図画工作、そして職業関係の教科を置いた図式が見られる。この図式は解明的とはいえ、質的に見れば後進性の強いものであったといえよう。なぜならば、学制頒布を経て明治十年代の終わりごろ、学者某は、図画や手工のような教科を評して『貧乏人はすすんでこれらの教科を学ぶことが得策であ

る』とし、その理由の第一に、腕に職を持つことは、自分自身の生活を利するためになるからと述べている。欧米の図画や手工（工作）の教育の考え方には、むろん直接的な職業としての効果をそれらに期待するむきも見られるが、作ることや描くことの学習を少なくとも教養・知性の出発としてとらえようとする方向があり、ここに基本的な彼我の差が感じられる。したがって、欧米から移入された図画や手工の教育の表面的な効果には敏感であっても、一段と深い、教育の効果を理解することはできなかったといって良いであろう。別の言い方をすれば、わが国の近代化がそれほど性急さを必要とした訳であり、教育そのものを知識を学ぶこと、手に職を持つという方向によって達成しようとした姿を見ることが出来る。」^{※3}このようなことから、わが国の手工すなわち工作教育の始まりは制度によるもので、与えられた教育で日を追って分解され、欧米諸国とは逆に、今日では、本質を求める教育となった。

創設時の明治20年度における手工教育は、当時の文部大臣であった森有礼の訓示から、実利という目的が目立った。この目的は効率化というねらいとして、すなわち教育としての在り方を追求されることになる。当時、美術家であった野尻誠一がドイツに留学し、物理学の後藤牧太^{※4}はイギリスに留学していたので、当時の政府は、両名にスウェーデンのネースにある手工教育のスロイド・システムについて調査するよう命じた。このことについては、「ニルスのふしぎな旅」の童話にも登場する。この物語は子どもたちに冒険による夢と希望を与えるもので、スウェーデンの女流作家セルマ・ラーゲルレーヴが1906年に執筆した児童文学である。原題は「ニルス・ホルゲションの素晴らしきスウェーデン旅行（スウェーデン語：Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige）」の意である。この物語の原文に、「ニルスが白鳥ののって学校の中をのぞくと『鼻ひげをはやした2人の東洋人が参観している』』という文があり、これは野尻誠一と後藤牧太の存在を表している。しかしながら日本語訳版には割愛されている。^{※5}これにより物理学者である後藤牧太も手工科の指導者になった。このスロイド・システムの導入により、わが国の工作教育のありかたが、今日のあるべき姿として明確な方へすすむことになった。特に、わが国の手工教育は、こ

※2 山形寛著「日本美術教育史」黎明書房1967

※3 奥田真丈監修「教科教育百年史」建帛社1985, p.409

※4 奥田真丈：上掲書、執筆宮脇理（元筑波大教授）、「山形寛：前掲書」参考による。

※5 これを読みとったのは、石原英雄（広島大学教授：広島大学学校教育研究紀要第I部掲載1982）である。

の後、上原六四郎によって創設され、岡山秀吉によって基礎が確立されていったのである。すなわち、工作教育は、作る学習を教養や知性の出発としてとらえようとする方向と手に職を持つという方向によって達成しようとするものであるというものである。以下、今日迄辿ってきた工作教育について、過去の教育者の文献等を引用して、考察を含め述べる。

4. 文献から見る図画工作教育の時代的変遷

4-1. 大正時代の手工教育～稲森縫之助著「圖畫手工の教育」より～

「圖畫手工の教育」は、筆者が勤務していた東京成城小学校を舞台として、大正14年10月に出版されたもので、成城小学校研究叢書、第十四編とし、A5版、484頁からなる集大成本である。当時には豪華な、布張り上製本である。セクションの合間に数点の写真や絵、中にカラーも挿入され、定価3圓80銭という高価な本でもある。この本の執筆にあたって、多くの協力者を得ている。「自序」の末端に、小学校の中の同僚の人々はともかく、画家の横井弘三、松岡正雄、石井柏亭、東京女子師範の谷籙太郎、明星学園の霜田静志等、現在もお著名な人々の名が連ねてある。当時はまだ図画工作ではなく、「図画」と「手工」はまだ統合されていなかった。それにもかかわらず、「圖畫手工の教育」としている。これは著者「図画」と「手工」が統合されることを予知していたのだろうと考えられる。著書名における「手工」は現在、「工作」として、また「図画」と統合したのは、国民学校令の昭和16年からである。

さて、この著の「序」には、当時の校長、澤柳政太郎が「近来、芸術教育が喧しく唱えられている割合に、其の成績を向上する為に如何に図画手工の如きを指導してゆくべきかという事に就いては、其の実際の研究が少ない。教育の為に遺憾に感じていた。…(略)…稲森君は多年成城に於いて実地研究の後、ここに図画手工教育の実際に於いて、その研究を発表するに至った、…(略)…図画手工の教育は子供の生活に中心を置く教育の立場からすると誠に重要な教科であることは今更述べるまでもないことであるが、此の図画手工の教育が、児童自身の創造性、児童自身の芸術活動を育てあげる事には違いないが、そうゆう間に、将来の国民として美術工芸

に対する理解と批判の力を養う事も必要な事で、…(略)…此の教育が非常に大切な任務を教育上、殊に我国の教育上に有する事を信じる。…(略)…図画手工の教育は目的に於いても課程に於いても方法に於いても今は実に混沌たる様である。…(略)…児童の内面的な児童芸術の本体に浸潤して、成長と教育との微妙な点を明快にとき、児童創作の根本的実質に触れて、図画手工教育の新しき精神を児童の内に求めて総合的取扱いを説き、実際の方面の過程と方法と教材を提供したる事…(略)…」^{※6}
 (註：原文を現代漢字、仮名づかいに直した)と記している。大正時代は、それ迄の臨画教育から、山本鼎がもたらした「自由画教育」(1918)の影響を受け、児童の表現に自由さ、さらにその内面を見る事を、実践して示した。当時では画期的なものであると考えられる。この稲森が行った事は、戦争時の国民学校令によって、忘れ去られていった。しかし、この考えは、戦後の教育に大きく復活し、今日の図画工作教育の理念にあるのだが、現在の小学校の教諭は、ここまでの熱を感じない。

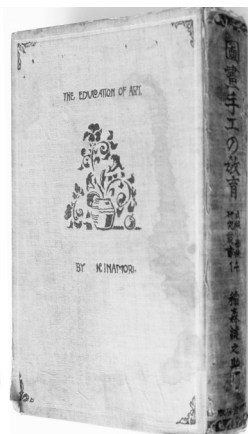


図2. 著書の外観

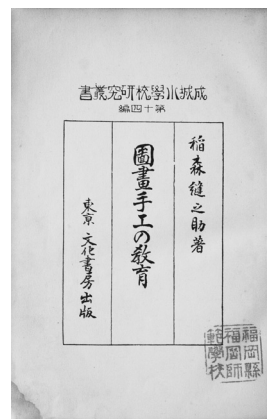


図3. とびら

4-2 昭和初期「手工教育」～岡山秀吉、阿部七五三吉、伊藤信一郎共著「新手工教科書」より
 本書は、A6版で上質紙290頁、活版印刷によるもので、ステープラーで綴じ、編纂されたものである。著者の岡山秀吉は、前述しているように手工教育の基礎を確立した人で、明治41年(1908)に「小学校に於ける手工教授の理論及実際」を著している。これは当時、文部省の検定済みとなっているものである。その後、「手工教育」を出版している。

※6 稲森縫之助著「圖畫手工の教育」p.1～3

次に阿部七五三吉は、昭和11年に「手工教育言論」を著し、手工教育史の時代区分を明確にした。そして伊藤信一郎は、山形寛とともに教科書等の編纂をしており、雑誌「手工研究」に「新教材コンクリート工」「コンクリート工の実際」という題で数回に渡って発表している。彼の手工説のもっとも代表的な著は「手工教授学」である。

さて、本書の内容であるが、編纂目的は師範学校教授に要目に準拠し、一部を教科書として、特に応用練習材料として、各章の殆どを研究資料ということで掲げ、教授上の便宜を考慮した上で、参考書になるものとして作成されている。第1篇では「竹細工」について、第2篇は「粘土細工」、第3篇は「石膏細工」、第4篇「コンクリート工」、第

5篇「木工」とし、全5篇、17章、第72節で著され、本書の内容で、中心的掲載は、材料をもとにした教師の指導のための実践的な内容を簡潔に整理したもので、材料について教育に必要性を網羅したものと考えられる。この時代の画期的な教材は、第4篇「コンクリート工」で、これまでにないものである。「一、本書の改訂に際し特に意を用いた点は、新たに上巻四篇にコンクリート工…(略)…を増補したことと…(略)…教授及び学習の利便を計ったことである。」※7(現代漢字と仮名づかいになおした)として、凡例の項目の2番目に記している。

このように、この著は、当時の主要的5つの材料をテーマとして記述しているものである。

4-3 昭和10年代の女子師範学校の工作教育の実態～福岡県女子師範学校工作研究室編「基礎技術の研究」より

この本は戦時中に作成されたもので、出版会社による印刷物ではなく、ガリ版印刷の手作りのものである。ワラ半紙使用、20頁の糸綴じで、A6版である。しかしながら、きちんとした装丁であり、文字も一字一句丁寧に、手書きでありながら、活字を使ったように、仕上げられている。筆者は明記されていないが、福岡県女子師範学校工作研究室編と表記してあるので、当時の工作教育担当の教官が作成したものと考えられる。当時、学校教育は、国民学校と呼ばれている時代でもある。

さて、その著の内容であるが、全10項目で著され、一. 製図の基礎技術 二. 紙材とその基礎技術



図4. 著書の表紙

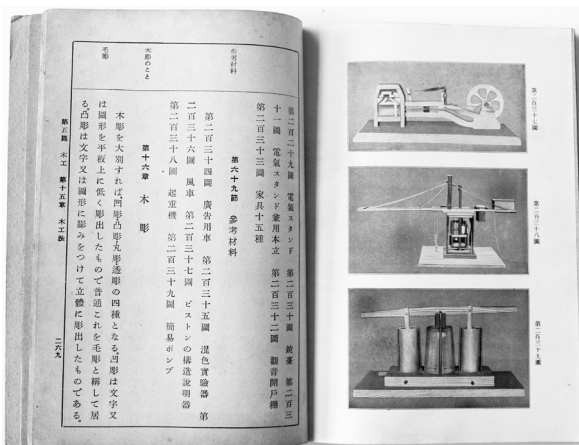


図5. 本文 (288, 289頁の内容)

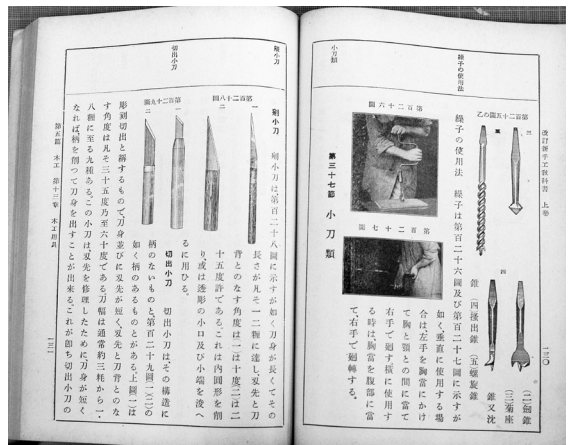


図6. 本文「木工」(130, 131頁)の説明図(奇麗で精密な道具の挿絵が掲載されている)

※7 岡山秀吉, 阿部七五三吉, 伊藤信一郎共著「新手工教科書」p.1

三. 黍稗^{※8}とその基礎技術 四. 粘土とその基礎技術 五. 竹材とその基礎技術 六. セメントとその基礎技術 七. 糸布とその基礎技術 八. 木材とその基礎技術 九. 金属材料その基礎技術 十. 塗装材料その基礎技術 (表紙より引用, 図7参照)とあり, これは実践的指導のための知識と方法を丁寧^{※9}に記してあり, 材料を主体として, 材料の性質や

その加工法, 用具等の取り扱い, すなわち基礎技術として掲載している。この著の在り方は, 内容から見て「新手工教科書」から見習ったものであると考えられるが, 「セメント」について記され, また材料の節約的使い方, 生活や国のために役立つ方法, その内容をきちんと示しているものである。

4-4 戦後の動乱期の工作～三苦正雄著「圖畫工作教育」より

この著は, B6版をひとまわり小さい158×127mmの大きさで, 217頁の上製本であるが, 本文はワラ半紙使用である。三苦正雄は, 当時, 東京高等師範学校教授, 文検委員であった。日本美術教育史^{※9}によると, 全国訓導協議会, 東京高等師範学校附属小学校初等教育主催の, 全国図画手工教員(或は訓導)協議会前後数回行われ, 会の記録が出版されている。とくに昭和10年(1935)は「日本の図画教育」と題して, 14年(1939)においては「今後の図画手工教育」と題して会の記録が出版されている。この中の発表に於いて, 三苦の内容について, いくつか紹介すると「日本の普通教育として日本独自のものでなければならない。図画教育は美育でありたい。たとえ実用的な教材をとるにしても, それが美育として十分なものでなければ実用にもならない。専門の教養ではない。日本独自の新文化の建設に有効な作用をするものでなければならない。子どもの教育であることをはっきり認識してかからなければならない。…(略)…」^{※10}である。当時, 日本は戦争に突入する寸前のときであった。

やがて終戦, 敗北にあった日本は, まだ, 動乱状態であったころ, 三苦は「圖畫工作教育」を執筆している。「序」では, 「永い間培いつづけて来た自分の思想を, 新しい時代にコースオブスタディーなどと考え合わせながら展開してみたのが本書である。広い意味にたつアートの教育が今後の日本に益々重視される。そしてこれはその基調としての造形の世界がかえりみられ, 青少年の心身の発達過程が大きく取り扱われる必要がある。ことにこの教育に於いては, 芸術が如何にして生み出され如何に味われるかは, 更に貴重な問題である。デューイ^{※11}は, 教

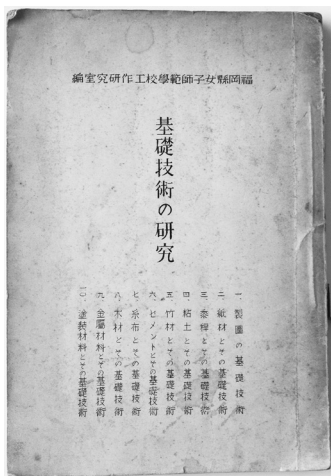


図7. 著書の表紙

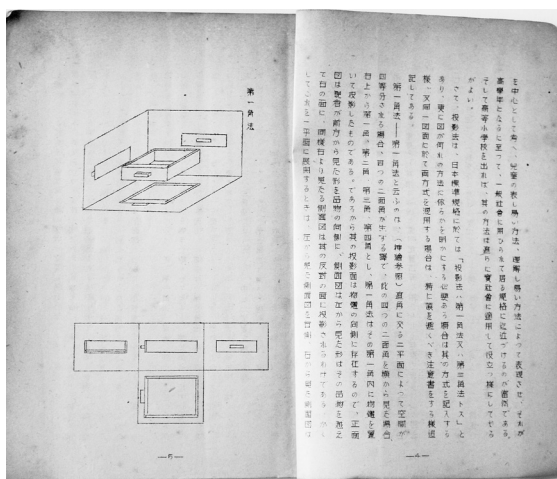


図8. 本文の内容(手書きできちんと文字や図が展開されている)

※8 黍稗とは, はいだ皮を材料として人形などを作る手細工のこと。今では殆ど見ることがない。 ※9 山形寛著黎明書房1967。965頁からなる最大の集大成の著。

※10 上掲載書 p.133

※11 ジョン・デューイ(英語: John Dewey, 1859年10月20日~1952年6月1日)は, アメリカ合衆国の哲学者, 教育哲学者, 社会思想家。チャールズ・サンダース・パーズ, ウィリアム・ジェームズとならんでプラグマティズムを代表する思想家である。また米国では機能主義心理学に貢献したことで知られている。20世紀前半のアメリカ哲学者のなかでも代表的且つ進歩的な民主・民衆主義者(ポピュリスト)だった。

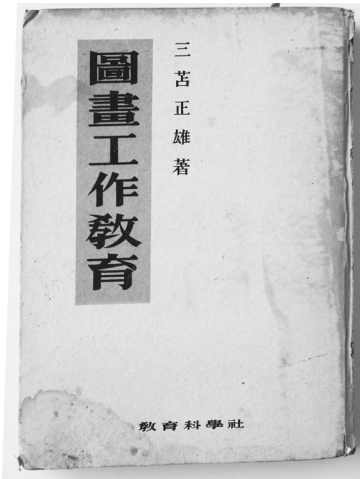


図9. 表紙

育は芸術であると述べている。芸術の教育は可能なりとも述べている。芸術の教育は、芸術するものを生み出す芸術的活動である。芸術の教育は理性的研究と共に情熱を必要とする。…(中略)…創造されるのは思想だけではない。芸術に於いては、思考理論と表現技術は常に創造されつつある。」^{※12}(原文／現代漢字に直した)と記している。

この著書は、すでに未来を予測し、芸術を筆頭に、鑑賞、芸術教育在り方、美術教育、造形教育と順おって記述され、指導指標、教育意義、目的、教材について要点を明確に捉えられており、現在にも充分通用するものと考えられる。

4-5 昭和26年の工作教育～手塚又四郎著「造形教育」より

手塚が本書を著したのは、東京教育大学教授になってからである。彼の略歴は、東京高等師範学校卒業後、熊本第一師範教諭、埼玉県師範学校教諭、東京市視学、東京都主事、東京第一師範学校講師、東京高等師範学校教授を歴任してきた人物である。また、朝倉文夫^{※13}に師事し、絵画では槐樹社展、1930協会展、独立美術展、

春陽会展に作品発表、また彫塑では日本美術展(日展)、現代総合美術展、日本彫刻家連盟展に出品しており、理論と平面・立体の実技を巧みに表現している。

さて、この著はB6版217頁からなる上製本であるが、本文はワラ半紙である。「造形教育」に副題として「新しい美術教育」としており、まえがきでは「造形美と造形技術とを文化創成期の気魄もて身につけ、人類社会のための新しい価値の創造力を培わんとする。それを私は造形教育が辿ろうとしている一條の道としてみつめる。…(略)…新しい造形教育の課題は美術を図画工作即ち学校教育課程としてのマンネリズムの沈滞から離脱せしめて社会の技術、社会の美術として認識し、自然及び人工からの吸収を新鮮にし、カリキュラム構成の角度から如何に考究アレンジしようかと言うことである。」^{※14}ということから、彼の示しているものは、これからの美術・図画工作教育は、今までの内容をそのままではなく、新しく日本の美術・造形のこと、世界の美術・造形を紹介し、未来の造形の在り方を記載している。今日で言う、グローバル化の示唆でもあるように読み取られる。

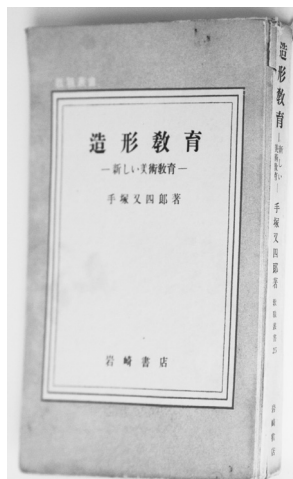


図10. 著書の外観

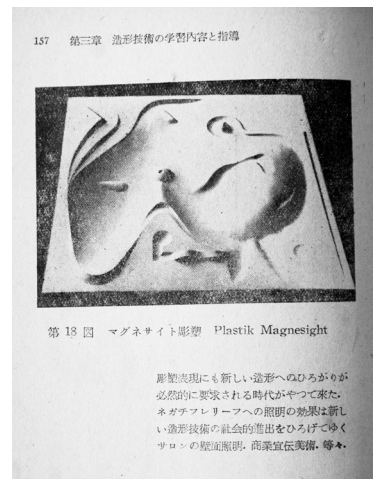


図11. 掲載内容の一部

※12 上掲載書 p.1～2

※13 朝倉文夫<あさくらふみお>1883年(明治16年)～1964年(昭和39年)は、明治から昭和の彫刻家(彫塑家)である。号は紅塚(こうそ)と称し、「東洋のロダン」とも称された。代表作に「大隈重信像」1932年(昭和7年)(早稲田大学、朝倉彫塑館。登録有形文化財)、「三相」1950年(昭和25年)(朝倉文夫記念館、朝倉彫塑館)、「太田道灌像」(1952年(昭和27年)(東京国際フォーラム内)、「翼の像」1953年(昭和28年)(上野駅グランドコンコース内。上野駅開設70周年、特急はつかり運転開始記念として作られた)、他多数。

※14 手塚又四郎著「造形教育」p.1～4

4-6 渡辺鶴松著「新しい図画工作科」より

この著はB6版の170頁、上質紙上製本である。著の最初の頁に「すいせんのことば」があり、当時東京教育大学教授、教育学部長であった石川脩平が書いている。「我がくにの教育が、まさに明治以来の一大転換期にあつて新しい変貌をとげつつあることは周知のところである。しかし、事実としてその新しい教育法をどう実施していくか。(行替え)そこに、文部省の学習指導要領が示されるゆえんがあるが、『コロンブスの卵』にも以て自分のものとしてそこに示された学習指導をぐんぐん進めて行くには、学習指導要領が、編み出され、生まれてきた根本にふれ、そのねらいを知ることができて、始めて、われわれは、安心してその方向に進んでいくことができるのである。その意味で渡辺鶴松君が『あたらしい図画工作科』を著されたことに深甚の敬意を払うものである。…(略)…」^{※15}

この著の冒頭に、学部長が戦後の動乱期から脱し、新しい教育の方向性をこの著に期待を寄せていることが分かる。それは「前書き」では「近頃、小学校の教育にたずさわっておられる諸氏から『これからの図画工作教育はどうあればよいのか』ということ、しばしば尋ねられる。その都度説明はするものの、この問題は一口で説明できるものではなく、慎重に考えていかなければならない。これについて文部省から、新しく学習指導要領図画工作科編が刊行されるから、これについて十分吟味していけばよいわけであるが、それには相当の努力と時間を要するであろう。しかしそのような事は実際教育者のしなげなければならない事ながら、なかなか骨のおれることである。そこで私はいろいろな質問に答える意味で、ここに自分の考えを一通り述べて、実際指導にたずさわる方々の御批判を願うこととした。…(略)…」^{※16}として、「新しい図画工作科-在り方とその指導-」と題し「新しい図画工作教育の大きなねらいは何か」と問いかけから始まっている。そして「図画工作科は新教育の発足と共に生まれた教科であるから、今までであった図画科・工作科のよりあい世帯ではない。従つて将来教科の名前が変わつたとしても、その精神は変わらない。さてこの図画工作科は何のために生まれたのであろうか。とりもなおさず『教育の方針』にもあるように『文化の創造と発展に貢献する

ような人間を作る』ためであり、しかもその文化人の資質として持たねばならない才能をつけるためである。…(略)…図画工作の受持つ領域はとりもなおさず、生活を明るく豊かにする方向であり、それにかくことのできない能力とか態度とか習慣などを養つて、個人としてもち論のこと家庭人・社会人として平和な文化人として生活を営むことのできるようになるのである。その見地にたつて図画工作教育の大きなねらいが上げられるのである。」^{※17}として、各学年の目標、在り方、基本的項目や授業の姿勢について整理し、その方向性を明確に記述しているものである。今日の図画工作教育の発端になつたものであるが、この内容は現代の混沌とした教育に当てはまる向きもあると考えられる。特に、現在もなお図画工作教育に対する偏見があり、絵は上手に、ものは巧みにつくらなければならない風潮があり、この昭和26年を境に、上記にもあるように図画工作教育は「生活を明るく豊かにする方向であり、それにかくことのできない能力とか態度とか習慣などを養つて、個人としてもち論のこと家庭人・社会人として平和な文化人として生活を営むことのできるようになる教育」である。

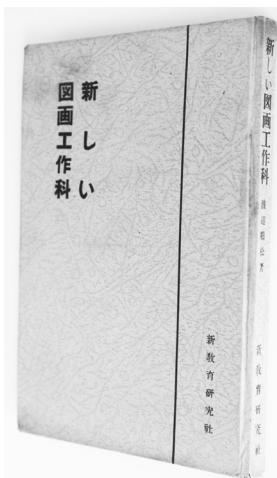


図12. 著書の外観

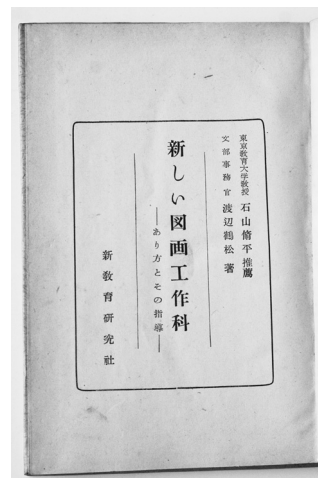


図13. とびら

4-7 昭和30年、山形 寛 著「わかりやすい学習指導書 図画工作科」より

本書はB6版をひとまわり小さいサイズ120×150mmの大きさ、本文ワラ半紙で平綴じ仮製本の装丁である。「はじめのことば」では、「図画工作

※15 渡辺鶴松著「新しい図画工作科」p.3

※16 上掲書 p.5

※17 上掲書 p.6

は、教科書もなく、適当な指導書もなく、文部省で昭和二十二年度に出した指導要領だけでは、どのようにしたらよいかわからないが、どうしたらよいのか、との質問をよく受けるのである。本書はそういう質問をされる方にお答えする意味で書いたのである。…(略)…^{※18}として、戦後の教育の混沌さのために、著したとしている。そのため表題に「分かりやすい」と、丁寧に表記している。山形は、当時、文部省に在籍しており、アメリカのGHQの指令により、コースオブスタディーを作成せよという命令から、まだ試案である指導要領を昭和22年度版として執筆している。その後、このことがらについて彼の集大成として出版した「日本美術教育史」に載せている。

さて、この「わかりやすい学習指導書 図画工作科」で、「第一章 図画工作教育の目標」では、「一 図画工作で、絵をかかせたり、物を作らせたりするのは、何のためか」^{※19}という疑問の投げかけから始まっている。当時の小学校教員がそれまでとちがった文部省の指導要領に戸惑いをみせていたことが伺い知ることができる。そして、この投げかけについて「1 図画工作の学習は子供を絵かきにしたり職人にするためではない。」^{※20}とゴシック体の文字で銘をうっている。次に「2 活動性のはけ口」^{※21}とし、子どもは、じっとすることなく活動的で、自然のまま捨てておくと子どもは、ある方向性を見つけないという。すなわち造形活動は、子どもの「はけ口」としてさせるものとしている。ひきつづき「3 造形活動をすることは子供の本性」^{※22}という項目で、そして「4 絵をかいたり、物を作ったりすることは有形的な言葉としての意味をもつ。」^{※23}と言いつつ、これは、人は誰でも自分の見たり、感じたり、考えたり、経験したことを表現したいという欲求があり、これを言葉や文章、身振りなどいろいろな方法で表そうとする。子どもはとくに絵や製作物で表そうとすると示している。次に「5 絵をかいたり、物を作ったりすることによって、生活経験を増す。」^{※24}としている。最後に「6 喜びと誇りを持たせる。」ここでは、子どもの発達に於ける心理状態について説明して、批判力が先行

すると表現しなくなるが、自己の作品に対する責任を持つことによって、全ての仕事に対する基本的態度となり、民主的教育の基盤となるとしている。項目「二」では「絵をかいたり、物を作ったりすることは、目的か、方法か」^{※23}という中に、教育の目的を明確に記している。「日常生活に必要な衣食住についての理解と技能とを養い、家庭生活や社会生活を明るく豊かにし、更に産業の発達により影響を与え、平和的な国家・社会の形成者としての資質を與える。」^{※24}以下、「第二章 図画工作科の教材」「第三章 指導計画」「第四章 指導方法」「第五章 学習結果の評価」としている。ここでは詳細なことを割愛する。

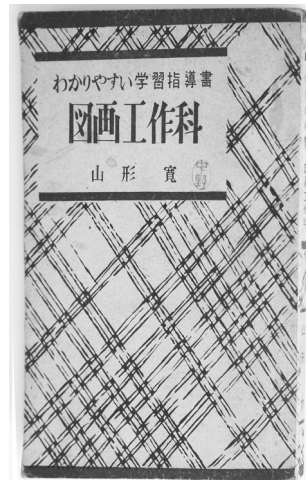


図14. 著書の表紙

4-8 昭和36年における図画工作教育の明確化～美術教育学会編「図画工作の教育」より

昭和36年頃は、日本の経済も豊かになり、新しい教育も10余年という時間が流れ、安定期ともいわれるようになった。この書は、202頁の平綴じ、仮製本であるが、質の良い(上質)紙を使用している。「はしがき」では、その流れを記している。「わが国の美術教育が、義務教育課程に登場したのは、明治5年小学校に図画科として置かれたのに始まり、戦後、新教育制度が実施されるに至るまで、独

※18 山形寛著「わかりやすい学習指導書 図画工作科」p.3

※19 上掲書 p.6

※20 上掲書 p.7

※21 上掲書 p.8

※22 上掲書 p.9

※23 上掲書 p.13

※24 上掲書 p.15

立教科として存続した。新教育は、制度上にも内容上にも革新し、明治20年に誕生した手工科（国民学校令では工作科となる）を総合して、図画工作科の名称のもとに、原理、内容、方法ともに新時代への態勢確立へと発足した。新制度に置ける図画工作科は、単に図画科と工作科を合体したものではなく、現代民主主義社会の造形芸術が、純粋美術と実用美術の境界を除いた一体のものとして理論づけられている現代芸術科学を根拠としたもので、その名称もいろいろ論議されたが、文部省は図画工作科に決定した。…（略）…普通教育における、小学校、中学校、高等学校の基本的原理なり、目標は一貫したものである。しかし、教育方法は発達段階を無視しては成立しない。…（略）…美術教育学は造形芸術を通して、人間形成を目ざし、児童の内部的成長を助けるための内容と、外部的なマスコミュニケーションによる造形文化の伝承と発展、産業造形、生活への適応など社会人としての完成を目的とする両面からの問題の研究によって、教育の原理と方法を組織立てたものである。すなわち、児童の造形活動における、児童自身の生理学的・心理学的な成長に応じて、物理学的条件の調整という問題の研究と教育指導の実践である。美術教育学の基盤となるものは、原理的には芸術学および教育学、実践的には教材論、学習論、評価論、調査研究などその領域は広く、学問的根拠は深い。美術科教育学の研究はまだその途上であって、この道の研究には多くの問題と困難がある。われわれも、新教育制度発足以来十数余年間、研究と討議を重ね、苦心して今日に至って

いる。…（以下略）」^{※25}以上のように、戦後の動乱から、教育体制を十数余年間駆けて、美術・図画工作教育の在り方を明確にしている。この内容は、教育要領改訂が10年間を境に行われているものの、今日まで50年経ち、この間、主たるものは変化していない。また、造形美術について、「I 美術教育の本質」で「体系と領域」について以下のように、明確化している。これは、今もなお生かされているものである。（図16）

5. 考 察

本研究における目的は、今日の工作教育の現状において、驚く事態に、疑問を持ち問題提起とした。過去からの在り方から時代を捉えて、入手することができた文献を手繰り、それぞれ大正、昭和初期、戦時中、戦後の4つの変化ある時代に著されたものを紹介し、その主旨をと内容を記述してきた。また、本の装丁の在り方も時代の特徴としてあげてみた。紙質や装丁の仕方によって、その時代背景、経済的事情など伺い知ることができる。そして著書の内容は、教育として必要な事柄を将来担う子どもたちに指導すべき事柄を掲げている。

時代の流れから察すると、大正時代において、明治の学制における最初の教育から、図画や工作の教育をどうすれば良いかという試行錯誤から、来ている。当時は技術的指向として、役に立つ技術という目的から、その教育法は、お手本による「模倣・模写」であった。

図画では「臨画」と称され、この教育は今もなお、現存している。また、大正期に、この「臨画」排除のために、主張された「自由画教育」もまた、戦時中を除き、今日に至っている。自由と模倣のこの双方の在り方は、矛盾しているにもかかわらず、現在の学校教育の場で実際に執り行われている。特に見られることは絵画コンクールである。入選入賞するために、子どもの自由な発想を大人の目で刺激を与え、写実（模倣的な絵）を指導している向きが多分にある。

工作教育もまた、時代の流れと共に変化してきているが、手による技術取得により物を作ることで、これは生活に役立つためのものとして教育に投じられてきた。日本人として、手の器用さは伝統文化に見られる。この文化は日本の各地方で現存しているが、現状の教育の場では、生活のための物を作る必

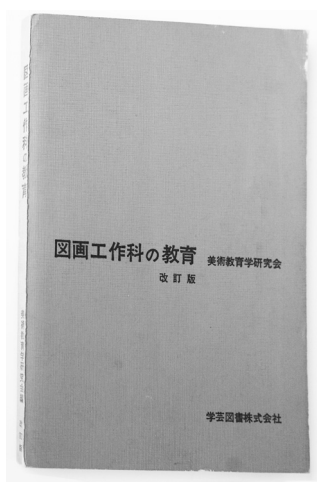


図15. 表紙

※25 美術教育学研究会編「図画工作の教育」p.1～2

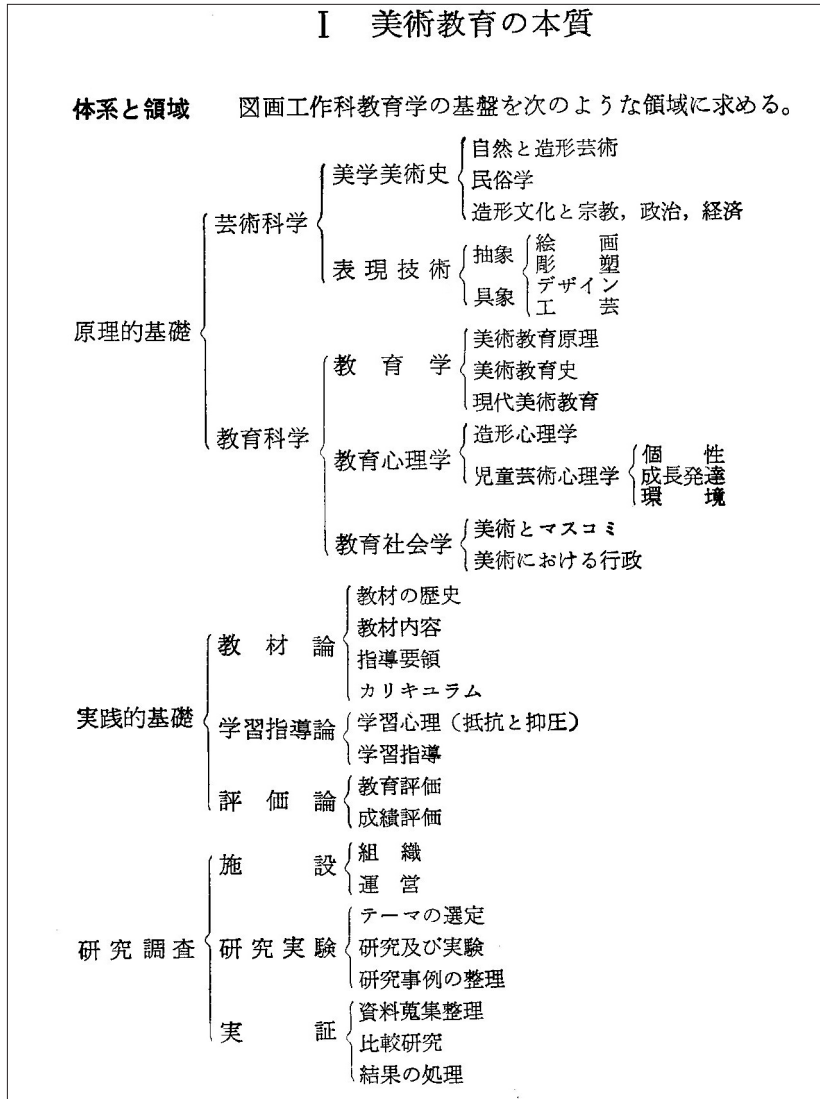


図16. 美術教育学会編「図画工作の教育」の「体系と領域」p.9より出典

要性がなくなってきているという解釈もある。我国の生活品は、お金さえあれば、いつでもどこでも手に入るといった便利な国へと変貌していつている。

また、工作品はその専門家に委ねれば入手できるという概念である。そのため、工作の授業はキット製品で授業を賄ってきている。おかげで、これまで肥後守といった刃物も持たなくなり、ましてや鋸など必要ないものとなっている。

日頃の生活から離脱している刃物などについて、これまでの図画工作教育の先駆者からの提案として

文部科学省ではまとめていると考える。すなわち学習指導要領図画工作編では「2 内容の取扱いと指導上の配慮」のなかで、「2 - (3) 材料・用具の取扱い」として、「ア 第1学年及び第2学年」では、「土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類など身近で扱いやすいものを用い、児童が十分慣れるようにする」^{※26}とし、「イ 第3学年及び第4学年」では、「木切れ、板材、釘、水彩絵の具、小刀、使いやすいのこぎり、金づちなど児童が適切に扱うことができるようにす

※26 文部科学省「小学校学習指導要領解説図画工作編」日本文教出版2008p.61

る」で、そして「ウ 第5学年及び第6学年」では「針金、糸のこぎりなどを用いる児童が表現方法に応じて活用できるようにする」^{※27}として具体的に明記し、指導者に呼びかけている。これらの内容は、先にあげた図画・工作教育者の先駆者からきた経緯であり、時代の流れと共に付け加えられたり、削除されたりしながらも今日に至って来ているが、文部科学省の示すものに、どこのだれがということは一切書かれていない。しかし、この指導書を編纂した人たちの名前は最後に明記されている。彼らが実際に行ったことではなく、また明言したことでもない。先駆者からの、これまで培われてきたことを伝承（写）したものに過ぎないと思う。したがって、この研究によって言えることは、先駆者の提案によるものとして今日に至っているということである。

6. むすびに

今回の研究は、これまでの図画工作の流れについて、入手することができた当時の出版された著書をもとに部分的ではあるが、その時代の図画工作教育の考えをピックアップしてきた。この研究を通して、現在の問題について解決すべき糸口が見出された。しかしながら、現今、過去において子どものための素晴らしい教育研究がなされ、それが指導者となる師範学校等に浸透していったにもかかわらず、理解されないまま、今日に来ている面が多分にある訳であり、問題が生じている。これからの課題は、教育の先駆者が絶え間ない努力をして今日にきたこと、そして現在があること、これらを如何にして小学校の教諭に理解させ、子どものための図画工作の指導を広げること、そして将来的に全国、全員の教諭が実体験を基に指導できるようになることを切に望むものである。

資料を手繰るにあたって、今回の貴重な資料を入手したものの、見落とししたものがあり、不十分な説明でもあった。今後に於いて、詳細な事柄を調査して、さらに問題解決して行きたいと考えるものである。

最後に、本論文執筆にあたり、ご指導戴いた方々にお礼を申し上げます。

2013年11月

参考文献

- ・山形 寛 著「日本美術教育史」黎明書房1967

※27 上掲書 p.61